

尋出し、早々可上候。急用事候間、扱申遣候。不可有油斷候。最前申遣候追鳥がりの事、雪次第に可申付候也。

十二月廿九日

利家印

藤兵衛殿

久兵衛殿

右は慶長三年の頃ならんか。秀頼君へ進上のためなり。又越中の牧馬は、原本信長記に、天正七年十月廿九日越中神保殿より、黒葦毛御馬進上。同九年三月十日信長京都より安土へ御下り。同十二年神保越中并國衆安土に至而參着、國衆より御馬九つ進上。佐々内藏助も御鞍・鑾・轡・黒鍔進上被申候。同年十月廿九日、越中より黒部立の御馬、當歳或は二歳を初として十九疋、佐々内藏助より牽登せ進上被申。使團藏坊とあり。又温故足微に左の印書を載す。馬一疋葦毛到來候。誠遠路懇情喜入候。別而可自愛候。委曲將曹可申候也。

六月十五日

信長黒印

屋代右衛門どのへ

舊説に云ふ。將曹は加州竹橋より出づる博勞也と。平次按

するに、天正九年に勝寫せし馬書の奥書に、北陸道賀州河北郡四番生住竹橋前屋代少助与申者也。時に天正五年七月廿三日蒙宣旨、馬道天下一也。爲後日之如此記置所也。天正九年三月吉日屋代左近將曹橋朝臣書俊判。とあり。されば此の人は、加賀國にて馬術に長ぜし人なる事知られる而已ならず、加賀國博勞の祖と云ふべし。又金澤町會所留記に載せたる、元祿二年五月博勞頭取佐野六兵衛の願書に、陽廣公御出生之時、微妙公之御意を以て、佐目之御馬一疋祖父忠右衛門指上、松雲公御出生之時も、於小松微妙公之御意を以て、鶴毛之御馬一疋親金太夫指上、御代々爲御吉例御馬上來候付、今般御出生之若君はも御馬指上度。とあり。右若君は綱紀卿の長子久丸君にて、今年四月十二日出生、同年六月二日早世也。又安政二年十二月能登國羽咋郡里本江村の長百姓藤右衛門と云ふ者、先代より牡馬多く飼置き、毎歲遊化せしむる處、既に二百餘疋に相成に付、二歳の駿馬を撰出し、毎年一疋宛往々獻呈致し度旨出願に及べり。藩主中納言齊泰卿の公聽に達せし處、奇特の旨賞譽に預り、それより毎歲良馬を見立て、金澤城外堂形の厩

まで牽來れる事、恒例の如く成たりしかど、明治廢藩の際止められたり。是等の事件も、舊藩の美事、國民化服の餘慶ともいうて可ならんか。故に今載す爰。

○藩藩駿馬之傳説

元祿以前、淺野川關助馬場に馬市を立てしめられて、加賀・能登・越中の牧馬、および他國の博勞共牽來りける駒共を一覽ありしは、駿馬を得ん爲に利常卿のなましめられしものならんといへり。いにしへより乘馬は、武勇を勵む第一のもの也。故に古來出軍に駿馬を撰べる事、源平盛衰記・平家物語以下の戦史にて知られたり。されば吾が舊藩祖大納言利家卿、天正十八年關東北條征伐より、直に陸奥・出羽兩國の仕置の爲め、豊臣秀吉公の命に依りて出馬ありし時、きぬ川俄に出水せしに、利家卿京の水といふ名馬に乗りて川を越え給ふよし、岡本慶雲が末守記に載せたり。村井長明の陳善錄にも、利家様奥州の仕置に御越候へと御下知にて御下り被成候。先手衆河を渡し候跡より、殊之外大水出、利家様京のみづと申御馬にて馳廻り御渡し被成處、利長様御年寄にこされたりと御いらち、則御渡被成、小將馬廻

の人々、我先われさきと争うて渡りけり。とあり。おもふに藩祖利家卿は、尾州荒子以來召料の駿馬共多かるべけれど、其の名の記録中に記載あるは、京の水而已ならんか。又二世贈大納言利長卿は、慶長五年大聖寺城攻の時乗り給ふ亘理黒といへる駿馬、是隨一なりといへり。關屋政春の古兵談に、利長卿の御乘馬に亘理黒と云ふ名馬あり。元來堀左衛門督の家禮亘利八右衛門と云者所持の馬なり。長さ四寸餘り有りて、眞黒無類の名馬也。慶長五年淺井繩手合戦の時、寺井の三堂山より彼馬に召され、立田の中を駈通り給ふに、平地を行くが如し。御秘藏斜ならず。其後加藤肥後守所望に依りて遣され、清正秘藏せられ、此馬四十七歳にて斃る。希代の名馬也といふ。とあり。三州志體撰餘考には、亘理黒世本作渡黒也。此馬一名平野。眞黒の駿馬なり。後に微妙公へ進ぜらる。其の初め越後の土亘理八右衛門が馬なるを、瑞龍公乞取り給ふといふ。頭註に云ふ。八右衛門は堀左衛門督の家士なり。越後堀家傳書には、此の馬初は蒲生氏郷の土渡利八右衛門が馬なるを、堀秀政の家老堀監物乞取り、口を入れて名馬となる。右近の馬場に於